

京都新聞賞

「私の準備期間」

向日市立西ノ岡中学校 3年

橋本 青空



臨時休校の知らせを受けたとき、私は正直喜んでしまいました。しかし時間が経つと、二年生の終わり方に不満を抱いたり、徐々に早く学校に行きたいと思うようになりました。何故なら、こんなに長い期間友人達と共に学校へ通えなくなることは予想もつかなかったし、さらに休校の延長が発表され、終わると思っていた休校期間が延びてしまったためです。

私は休校中に自分の中の学校の位置付けが変わりました。学校とは強制的に行かされるものは無く、自らが学びたいという意志を持った上で、新しいことを学ぶ場所だと改めて知りました。それ故に学校はこの休校期間の間に私の中で、今まで以上に大切な場所になりました。

私が早く学校へ行きたくなくなったのにはもう一つ理由があります。それは何故だろうと疑問に思

うほど学校が楽しいためです。何故学校がここまで楽しいのかを、私は次のように考えました。第一に友人や先生方と新しいことを学べる喜びがあるからです。また、学校生活には、特有の大変さがあります。例えば、六時間の授業を毎日受けていること、その後に部活動があることなどです。どちらも一見ただ疲れるだけのように考えられますが、この大変さの中にこそ学校生活ならではの楽しさがあると私は思います。何故なら、休校期間は授業中の教え合い、休み時間の何気ない会話や部活動まで無くなってしまい、あまり楽しく過ごすことができなかつたからです。

また、私たち中学生は思春期や反抗期、部活動や塾などでどうしても家族と過ごす時間が減ってしまいがちです。しかし休校となったこの期間に、家族と話す時間が増えた中学生は数多くいることでしょう。私もその内の一人です。加えて、私は家のこと手伝う機会が増えました。例えば、母と一緒に洗濯物を取り込み畳んだり、弟にミルクをあげ、寝かし付けたりもしました。しかし、手伝う機会や一緒に過ごす時間と共に増えてしまったものがあります。それは些細なことでの、口喧嘩や言い合いです。これは本音で話せる家族の間だからこそ起こるものです。とはいうものの、口喧嘩や言い合いが増えると苛立ちを覚えやす。実際私は、弟をあやすことが上手くできず、母に私が変わるからもう良いと言われてしまい、私は不機嫌になって母や妹に強く当たりました。その度に私は自室に籠もり、自責の念に駆られる

と両親や妹に謝るということを繰り返しました。そこで私はできるだけ、些細なことでの口喧嘩が起こらないようにするために、どんな工夫が必要かを、考えました。それは発言や言い回しに棘が無いかを注意するというものです。これは当たり前のことですが、家族の前ではどうしても頭で一度確認するという行程を怠っていたことに気が付きました。自分がかかりたくさんの棘のある言葉や言われた人が傷付いてしまうような言葉を知らぬ間に話してしまっていることが見えてきたので今後は改めていきます。

このように、休校期間は私にとっては感染症防止対策のためだけではなく、成長するチャンスを与えてくれた期間でした。

初めの成長は学校にどんな意識で通うかが変わった所です。以前は通わされているように感じていました。ですが、今は自らの意志で学校へ行きたいと思い通えています。

もう一つ成長できたのは話す前に言葉を選べるようになった所です。この力は人とコミュニケーションを図るときには必要な力なので、つけられてとても良かったです。

休校期間を経て私はこの期間を三年生になる前に急に与えられた、三年生への準備期間だったのではないかと考えました。この期間で培った力を今後の生活で活用し、より良い学校生活を目指します。